

特集

第43回日本自然災害学会学術講演会 スペシャルセッション 「ぼうさいイブニングカフェ」の場 を通じて考える実務・研究・学会 の関係

松田曜子¹

1. 趣旨

ぼうさいイブニングカフェ（正式名：ホンネで語ろう「ぼうさい」イブニングカフェ）は、コロナ禍で対面での学会開催もままならなかった2022年に、会員や防災に関心のある市民の方々と「肩の凝らない、しかし本質的な議論をできる場」をつくることを目的に企画され、2024年9月までに14回の開催を数えてきた（表1）。

「防災」という分野は、（1）最終的には人々の

生存に関わる問題である、（2）「防災」自体が総合技術から成り立っている、（3）日本には災害が多く、また気候変動の影響等により頻発傾向にあるといった特徴があり、それゆえ多くの方々の関心も得ながら、多岐にわたるテーマでカフェを開催し、今日に至っている。

それ自体は喜ばしいこととして、では、「学会」が「カフェ」を開催し、「ホンネで議論する」ということには、いったいどのような学術的意義や公

表1 過去のぼうさいイブニングカフェの開催概要（2024年9月時点）

回	開催日時	担当	参加者数	テーマ
第1回	2022年6月23日（木）	九州	42名	「くまもとクロスロード研究会の実践と課題」について語る
第2回	2022年8月25日（木）	中国・四国	44名	「子供たちへの防災教育と“モヤモヤ”」
第3回	2022年10月20日（木）	関西	対面38名 オンライン15名	「本音で語ろう『これからの関西の防災』 ハイブリッド開催」
第4回	2022年12月20日（火）	中部	41名	「個人的なケアの経験と、ケアとしての避難学試論」
第5回	2023年2月16日（木）	関東	28名	「知っておきたい災害保険の現状と今後」
第6回	2023年4月27日（木）	東北	61名	ナイトバー「復興のホンネー東日本大震災のできごとー」
第7回	2023年6月15日（木）	北海道	46名	「炎上必至“自助中心主義対策にあえてもの申す”」
第8回	2023年8月24日（木）	中国・四国	41名	「最近よく耳にする「災害ケースマネジメント」ってなに？」
第9回	2023年10月24日（火）	九州	20名	「災害復旧・復興支援」大学と地域の関わりについて考える
第10回	2023年12月14日（火）	関西	対面40名 オンライン50名	「ホンマにできるの？今の防災」
第11回	2024年2月27日（火）	中部	51名	「雪国における冬の道路対応の今」
第12回	2024年4月16日（火）	関東	対面23名 オンライン6名	「荒川放水路通水100周年：荒川の今を知る」
第13回	2024年6月21日（金）	東北	61名	ナイトバー「復興のホンネー東日本大震災のできごと その2ー」
第14回	2024年8月19日（月）	北海道	38名	「ど〜する！？厳冬期の避難所」

¹ 京都大学防災研究所
Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University



図1 セッションの様子

益性があると言えるだろうか。このテーマの背後には、「学会」が持つ意味の変遷や、リカレント教育といった「大人の学び」を促進する潮流、さらには科学技術と社会の関係性など様々なトピックが潜んでいると見受けられる。本スペシャルセッションでは、社会人博士課程に進まれた方と、「ぼうさいイブニングカフェ」を担当し、かつふだんから市民の方と接する機会の多い研究者が集い、このテーマで語りあうことで、実務・研究・学会のよりよい関係についてそれぞれが理解を深める機会として開かれた。本稿では現地での議論を報告する。

2. スペシャルセッションの概要

スペシャルセッションは以下の通り開催された。また、セッションの様子を図1に示す。

2.1 登壇者

ゲストスピーカー（敬称略・登壇順）

川西 勝（兵庫県立大学）

湯井恵美子（一般社団法人福祉防災コミュニティ協会）

竹内裕希子（熊本大学）

小山 真紀（岐阜大学）

コーディネーター

松田 曜子（京都大学）

2.2 日時・会場

日時：2024年9月20日（金）午前9時20分～午前10時50分

場所：千葉大学西千葉キャンパス 工学部講義室（会場A）

3. 討議報告

3.1 趣旨説明

討議ではまず、コーディネーターの松田より、以下の通りディスカッションの趣旨が説明された。

- ・ぼうさいイブニングカフェは、コロナ禍で対面の学会開催が難しい中、2022年に市民と研究者が本質的な議論を行う場として企画された。
- ・カフェには幅広い年代が参加しているが、これまでの最多層は50代の社会人で、多くは学会のメールニュースを通じて自発的に参加している。一方、学生の参加者は先生の指示を受けて参加している傾向にある。
- ・防災の分野において学術コミュニティが市民との接点を持つことは重要であり、社会にとって

も有益と考えられる。

- ・パネルディスカッションでは、前半で川西さん、湯井さんから、社会人博士課程に進まれた動機や、学位論文を修めて感じることを伺い、後半は、竹内さん、小山さんから、防災の実践や市民活動家との関わりにおいて気をつけていることや悩んでいることを伺い、互いにコメントをいただきたい。

3.2 話題提供

話題提供ではまず、社会人博士課程のご経験がある2名の登壇者からご報告を頂いた。

(1) 川西勝さん (兵庫県立大学)

- ・川西さんはもともと読売新聞大阪本社の新聞記者で、文学部出身。災害報道に興味を持ち、2006年に研究調査員としてひょうご震災記念21世紀研究機構・人と防災未来センターに加わった。その後、兵庫県立大学にて減災復興政策を専門とする研究を行い、メディア・フレームの概念を用いて災害報道を分析した。現在は新聞社を退職し、研究者の立場から報道実務の改善を目指している。
- ・社会人博士課程に進んだ目的は、「災害報道は、本当に社会の防災・減災に役立っているのか」という疑問からだった。日本のジャーナリズムは、自己観察と自己客観化が不足しており、自己満足に陥りがちだが、体験的ジャーナリズム論だけでなく、マス・コミュニケーション研究やメディア論の知見に依拠した提言が必要だと考えた。
- ・博士課程を終えた後に思うことは、自己観察と客観化のためには、ジャーナリズムの実務と学会の関係性を強化することが必要だということである。また、防災の実践家もアカデミズムの作法による客観的な観察や検証が必要ではないかと思われる。

(2) 湯井恵美子さん (一般社団法人福祉防災コミュニティ協会)

- ・湯井さんは、現在福祉防災コミュニティ協会に所属しながら、福祉防災の研究を行っている。出身は熊本県で、学生時代に中国の歴史に興味

を持ち、西安に留学した経験がある。障害児の母となり、災害が起きたら息子はどうなるのか、ということを考え始めたことから、福祉防災に関心を持った。

- ・社会人博士課程に進んだのは、福祉防災に関する現状を知って、なおかつ保護者 (PTA) の立場で培った特別支援学校のネットワークを使えば、もっとできることがあるのではないかと考えたから。今でも、防災を通じて社会活動を行うことの重要性を感じている。
- ・「誰一人取り残さない社会」という言葉には、「私たちは何もできない存在ではない」という反感を感じていた。その後中動態 (國分功一郎) の概念に触れ、「みんなで助かる」という考え方を実践することが重要だと感じている。言い方を変えれば、障害者の自立は、社会とのつながりを支えてくれる人を増やすことであり、そのつながりが増えることは地域の支え合いが具体化された状態と言える。
- ・博士課程を終えて思うことは、実務者がアカデミックな視点を持つことの重要性を認識した上で、社会実装に反映されていない声をアカデミックに取り入れる必要があるということである。

続いて、大学で研究職にある登壇者から、市民との関わりについて話題提供を頂いた。

(3) 竹内裕希子さん (熊本大学)

- ・竹内さんは、熊本地震前から防災士養成講座や自主防災組織の調査などで市民との関わりを築いてきていた。熊本地震後は熊本大学の復興支援プロジェクトを通じて益城町に関与している。
- ・復興支援プロジェクトのひとつである「ましきラボ」では、益城町にコンテナを設置し「サテライトラボ」として、景観、建築、防災、まちづくり、交通計画など様々な専門を持つメンバーの教員が交代で毎週土曜日に滞在することを8年間続けている。
- ・「ましきラボ」の取り組みや復旧・復興への貢献、学生関与の効果などを論文にする方法を模索している。

(4) 小山真紀さん (岐阜大学)

- ・ 小山さんは、岐阜大学で地域の防災と人材育成に取り組んでおり、県と大学で設置した清流の国ぎふ防災・減災センターの運営に関与している。
- ・ 人材育成の活動を10年間続けていると、例えば受講生の人数が数値目標化されたり、当初の目標が人事異動で伝わらなくなったりし、活動自体が目的化してしまうことが問題と感じている。
- ・ 研究者としては、人材育成が必要な理由をエビデンスとともに発信し、政策提言を行うことが重要であると感じている。

3.3 フロアとの質疑応答

話題提供後、フロアとは以下のような質疑応答が行われた。

質問者1：障害をもつ当事者も含めて、実務者が言葉にできないことを、研究者が文章にするという役割もあるのではないかと。またこうした取り組みの際に、倫理的配慮についてはどう考えるか。

→ 障害を持つと言われていた人たちが自立するということは、自分でできることを増やすのではなく、自分と社会とのつながりを支えてくれる人を増やすということ。実務者と研究者の関わりもその点は同じ。

→ 障害があるから倫理的配慮がほしいというケースは少ないが、一方で例えばDVから逃げてきた人たちは、体の一部が写真に写るだけでも困ると言われることもあり、ケースによって様々である。倫理の問題は研究手法としても色々なやり方があるので、必ずしも実名を出したり個人をクローズアップする必要はない。

質問者2：研究する立場から見て、地域で防災の活動に携わる方々に期待することは何か？

→ 高齢化や過疎化もともない、地域の力が小さくなり、従来の機能を果たさなくなっているケースもある。そんななかで、防災という取り組みがキーワードとなり、地域がつながり直すことを期待している。

→ ものごとを動かすには、現場で問題意識を持つ人がいることが重要。それを指摘できるような

環境を整えておくことも必要。

→ 社会実装に反映されていない声を、実務者がアカデミックに取り入れるよう声を上げることはとても重要。

質問者3：長く研究者として地域に関わると、徐々に否定的なコメントを受ける機会がなくなってくる。それが信頼なのか、ちゃんと相対していただけなくなったのか心配になってきている。

→ 益城町との長い関わりのなかで考えると、時期によって求められる役割は変わっていると感じる。関係が少し遠くなったときでも、コミュニケーションをとり続けることが重要では。

→ 信頼されてきたのと、だんだんと言いにくくなってきたの両方では？ 研究者にも多様性が大事なので、ひとりの人とやりにくくなったときにフォローできる人材を研究者のネットワークでつなげておくことも重要ではないか。

4. まとめ

以上の通り、本パネルディスカッションでは、多様な立場から地域の活動とアカデミックな視点の融合について議論がなされた。研究者と地域社会の関係性は、互いに学び合う鏡のようなものであり、研究者が地域において、学びを続ける姿勢は今後も期待されるものである。